

〈研究ノート〉

ブラジル近代史の一頁としての「シンドウレンメイ事件」

三田千代子（元上智大学教授／上智大学イベロアメリカ研究所名誉所員）

〈目次〉

はじめに

日本人社会を二分した事件の概要

事件の潜在化と日本人社会の統合

再民主化がもたらした調査研究

おわりに

キーワード：勝ち負け抗争、「臣道聯盟」、人種主義、黄禍論、ナショナリズム、第二次世界大戦と日本移民

はじめに

第二次世界大戦をはさんだブラジルで、ほとんどの日本移民が何らかの形で関わりながら、400人ほどの日本人が犯罪者としてブラジルの法の下で裁かれた後、ブラジルの日本移民はこの事件に70年間口を噤んできた。日本の戦争結果を廻って始まったとされる「勝ち負け抗争」¹、ポルトガル語では「シンドウレンメイ (Shindo Renmei)」と呼ばれた事件で、ブラジルの日本移民社会ではタブーとされ、ブラジル社会では忘れられたかほとんど知られなかった事件である。ところが、軍事政権(1964-1985年)が終焉して21世紀に入る頃になると、この日本移民史の「闇のページ」とされた事件を扱ったポルトガル語の出版物が毎年のように刊行されるようになった。そのなかにはルポルタージュとしてブラジル最大の出版賞を受賞したものもある。

本研究ノートではまず「シンドウレンメイ事件」の概略を紹介した後、ポルトガル語の業績が世に出ることになるまでの過程とその後の経過を概観し、現代ブラジル社会を把握する一手段とすると同時に、ブラジルの近代史におけるこの事件の意義を探ることを試みた。

日本人社会を二分した事件の概要

第二次世界大戦が日本の無条件降伏によって終結すると、ブラジルの日本人の間で「日本大勝利」のニュースが流れた。1945年9月には、天皇の使者がサントス港にやってくるという噂が流れ、サンパウロ州やパラナ州の奥地から2000人に及んだとされる日本移民が帰国熱に浮かされてサンパウロ市内に集まったという。約20万人とされる戦前のブラジルの日本移民の大多数はサンパウロ州やパラナ州北部の奥地で農業に従事しており、この時日本からの使節を迎えようと日本移民がサンパウロ市²に集まったためである。町に異様な雰囲気漂ったことからサンパウロ警察は事態の收拾を市内の日本人有志に依頼した。10月3日、日本人社会の混乱の対応策を模索していた日本人有志に日本政府から終戦の詔勅と在外同胞宛ての東郷外相のメッセージが届けられた。いわばブラジルの日本人に対する「日本帝国からの広報」であった。

国交が断絶³していた日本とブラジル間の通信方法はかなり限られていた。日本外務省は終戦の詔勅と在外同胞宛ての東郷外相のメッセージを英文に翻訳し、仏文の説明書を付して、ジュネーブの赤十字本部に打電し、そこからアルゼンチン赤十字支部に転送され、リオデジャネイロ（当時の首都、以下リオと記す）のブラジル赤十字支部へと転送された。当時はサンパウロのスウェーデン領事館の日本人権益部が業務を停止していたことから、市内のイエズス会の学校サンフランシスコ学院（Colégio São Francisco Xavier）の院長に日本政府からの伝達文が届けられた。サンフランシスコ学院は、日本人子弟の教育のために開校された教育機関で、当時は日本人部を設け日本人子弟の教育に対応していた。院長でもあり日本人部を担当していたギード・デル・トーロ神父（Pe. Guido del Toro）によって元海興⁴支店長宮越千葉太に電文が手交された。こうした煩瑣な経過を辿って届いた終戦の詔勅と外務大臣のメッセージを宮越千葉太はサンパウロ市内在住の日本人有志と日本語に翻訳し、翌日4日には7人の有志の名を付した「終戦事情伝達趣意書」とともに各地の日本人集団地に配布した。日本人の多くは、この翻訳された詔勅やメッセージを日本帝国政府からの「広報」として受け入れることはできなかった。

サンパウロ州奥地やパラナ州北部の日本人集団地では流言飛語が飛び交い、ナショナリズムが高揚した戦時中のブラジル社会で敵性国人として厳しい監視と抑圧の状況下にあった日本人は、勝利した日本に帰国⁵することに望みを託していた。当時の日本移民の約9割は農業に従事しており、日本から取り寄せた本や雑誌に慣れ親しんでいた⁶。こうしたブラジルの日本人にとり、祖国日本の敗戦を心情的に受け入れることはできなかった。他方、祖国の敗戦を受け入れることができたわずかの日本人は、主として都市部に在住しブラジル社会からの情報に接することができた人々であった。これら「負け組」と呼ばれた日本人の一部は、日本人の混乱を鎮めるためにサンパウロ州内の日本人集住地を訪ねて戦争結果を説明して回るという「認識運動」を展開した。しかしその効果はなく、反対に日本の「勝ちを信じる／信じたい」日本人の反感を買った。終戦後半年を過ぎると、日本の敗戦を認めた人々を「（日本帝国、あるいは天皇に対する）裏切り者」として葬ろうとした「日本の勝利」を信じた人々によって一連の暗殺テロ事件が起り、日本人社会は「勝ち組」と「負け組」に分かれての騒動となった。この事件は日本人社会内部の事件に留まらず、ブラジル社会を巻き込むことになった。

「勝ち負け抗争」と呼ばれるブラジルの日本人社会の事件は、広義には1944年の「青年愛国運動」と名乗る日本人グループの薄荷栽培と養蚕業⁷に従事している日本人農家の焼き討ち事件から1955年の桜組挺身隊のブラジル引き揚運動までが対象とされる。他方、日本人社会の抗争事件の核となる暗殺テロ事件のみに焦点を絞ると、1946年3月から1947年1月までの10ヶ月間である。この間、サンパウロ市内及びサンパウロ州奥地の日本人集住地で戦争結果を受け入れた日本人を標的にした襲撃・暗殺事件が29件⁸起っている。最初の暗殺事件は、1946年3月7日、ブラ拓⁹の建設したバストス移住地で起こった。被害者はバストス産業組合専務理事溝部幾太であった。サンパウロからの終戦に関する伝達書を産業組合としてバストス移住地で公にしたことに対する報復であった¹⁰。溝部自身は、この伝達書を組合として組合員に知らせることで引き起こすことになる混乱を想定してかなり悩んだ様子が伝えられている¹¹。以後襲撃や暗殺が続き、4月1日から7月30日までに21件、7月と8月には16件のテロ事件が集中した。

サンパウロ市より西北西430キロから570キロの奥地パウリスタ鉄道延長線のツパン市とオズワルドクルス市とでそれぞれ起きた事件は、現地のブラジル社会を巻き込む展開となった。まず7月30日のオズワルドクルス市の事件では、同市内で放火や爆弾投与などのテロ事件がすでに続いており、たまたま町のバーで隣り合った数人のブラジル人と日本人のトラック運転手との間で口論が起

きた。日本人が勢いでブラジル人一人を刺殺してしまった。これがきっかけになり町中が日本人を襲撃するリンチ騒ぎになり、軍隊が出動し、沈静には3日を費やした。8月15日のツパン事件では、テログループがツパン市在住の日本人4人を襲撃し、3人を射殺した。町は騒然となり、日本人の自衛団と警察、軍隊が出動して暴動を抑えた。事件後、警察署長、市長、検事、裁判長など62名が、日本人をブラジルから退去させなければ、地方の平和を維持できないという内容の嘆願書を政府に送っている¹²。

折しも15年にわたったヴァルガス政権（1930-1945年 Getúlio Vargas）¹³が終焉し、1946年9月18日発布の新憲法の編纂が準備されていた時であった。19世紀末よりブラジルの知識人が抱いてきたアジア人に対する偏見と日本人に対する恐れが依然として続いており¹⁴、むしろブラジル向け日本移民政策が国策化されたことで反日的傾向は1930年代以降強まっていた。新憲法制定会議では、日本移民の再開について議論が持ち上がった。1942年以降日本とブラジルの国交は停止しており、戦後の日本移民を禁止する条項を憲法に挿入することを主張する議員グループ¹⁵と憲法ではなく普通法で対応できるとする議員グループとにまさに二分された。特定の民族を排除する条文を憲法に挿入することはブラジルの憲政史上に消すことのできない汚点を残すと判断した議長の決定票により日本移民入国禁止条項は憲法に盛り込まなかった。

同年7月半ばには、すでにサンパウロの州執政官が州庁舎に「勝ち組」500人以上を招き、日本人権益代表のスウェーデン大使と認識派の代表も同席させて、日本の敗戦の事情を説明して説得を試みた。この直前の5月にはブラジル政府が日本の新政府に再度敗戦の知らせをブラジルの日本人に周知するように依頼していた。日本政府は吉田茂首相の名で日本人の権益代表のスウェーデン領事館に敗戦結果を知らせる文書を送り、領事館はそれを館内に日本語で掲示した。しかし、ブラジルの日本人はスウェーデン領事館が関わっていることで文書の信憑性を疑った。その後にはオズワルドクルスやツパンの事件が続いたのである。そして最後の暗殺事件は1947年1月7日に起こり、サンパウロのスウェーデン領事館日本人権益部森田芳一に間違われた義兄鈴木正司が射殺された。

この10ヶ月間のテロ事件における死者数は23人、負傷者数は147人、容疑者は31,380人に上り、公安省（Ministério Público）は1,423人を告発した。1938年5月18日の法令431号に基づき社会秩序と国家安全に対する違反者として1946年に被告人となった者は381人、有罪判決を受けて国外追放された者は80人¹⁶で、ブラジルの日本人に対する大規模な司法裁判が開かれたのである。国外追放の判決を受けた日本人は刑の執行を待ってサンパウロ州沿岸の離島アンシェッタ島に収監されたが、結果的には1958年の時効判決により、1959～1963年に受刑者は順次釈放され、66年にはすべての受刑者の刑罰は消滅したと判断された。

これらテロ事件を推進したのは戦前すでに結成されていた秘密結社¹⁷「臣道聯盟」の会員と警察には判断された。サンパウロ州奥地の日本人社会には終戦を迎える前から秘密結社が20社ほど出現していたとされており、これらの中で規模が一番大きく、かつ最も組織化されていたのが「臣道聯盟」であったためである。パウリスタ鉄道延長線地域のマリア市で元日本帝国軍人を中心に結成されたとされる「興道社」が「臣道聯盟」の前身で、先述の「青年愛国運動」の支援者の一部も後に合流している。「臣道の実践」、「日本精神の堅持」に努力することを目的とした「興道社」の代表に、元日本帝国陸軍大佐であった脇山甚作が乞われたが、官憲の監視が厳しい状況にあることから辞退している¹⁸。そこで元陸軍中佐であった吉川順治が代表についた。二人の元日本帝国軍人はいずれも、薄荷栽培や養蚕は祖国の敵国を利することになるから栽培を控えるようにといった注意を喚起するビラを配布した。これにより、ブラジル国家の秩序を乱すものとして吉川は1944年に拘留されている。「興道社」の留守を預かったのは元大尉の山内清雄で、彼の下で「興道社」は活動目的に相應しい「臣

道聯盟」と1945年5月に改名され、同年9月に吉川が釈放されると、吉川が代表の任に就いた。「臣道聯盟」は1945年9月に活動の中心をサンパウロ市に移している¹⁹。同時に、山内は在郷軍人会をサンパウロ市で組織化し、支部を地方に設けており、両日本人結社は並行して活動を展開させていったと理解することができる。

政治社会秩序局(DOPS=Departamento de Ordem Política e Social)が当時調査したところによれば、テロ事件の犯人はいずれもサンパウロ州奥地の日本人集住地の農村出身の16～30歳の青年であったが、「特攻隊」²⁰と呼ばれた彼らの行動を指揮した人物やその組織的つながりは明確になされることはなかった。サンパウロ市内の日本人のクリーニング店が重要な役割を担い、犯行後に青年が身を潜める場所も用意していたようである。しかしその存在は、厳格な秘密とされていた²¹。

事件の潜在化と日本人社会の統合

1946年11月には「臣道聯盟」はすでに地方の支部をコントロールできなくなっており、再度拘留されていた代表の吉川は、1947年末に釈放されると、発足当時の理念や目的からかけ離れてしまっていた「臣道聯盟」の閉鎖を決定している²²。

敗戦の報によって二分されたブラジルの日本人社会の対立は、日本語新聞の再刊(1946年)や日本からの郵便物の再開などを通じて潜在的なものとなり、50年代に入ると日本人社会は統合に向かった。

1950年に戦後日本とブラジルの交流の契機となった古橋広之進を中心とする日本の水泳選手団訪問は、ブラジルの日本人が久しぶりに日本人の逞しい姿を目にする機会となった。51年には芸能使節団が招聘され、ブラジルの日本人に慰安を与えた。待ちに待った日本の船もサントスに入港した。この間、「勝ち組」をだまして金品を手にしていた「国民前衛隊」が逮捕されるということもあり、抗争の余韻は燻っていた。

1952年に実質的に両国の国交が回復すると、日本人社会が統合に向かって動き始めた。同年、サンパウロ総領事と日系社会の一部有志によって「サンパウロ市創立400年祭」祭典参加が決定され、翌53年には「サンパウロ市創立400年祭典日本人協力会」が発足した。1954年のサンパウロ市400年祭に参加協力するために日本人移民社会全体として祭典に参加する体制が整えられた。日本政府などからの支援とブラジルの日本人の寄付金によって祭典参加は実現した。これを機に多様な機能を持った包括的な日系社会の組織が結成され、戦前各日本人集団地の日本人会のそれぞれが領事館を通じて直接日本とつながっていたブラジルの日本人社会は、これを機に「ブラジルの日系社会」としての組織的統合が可能となった。1955年に日本人協力会は解散するが、その組織をそのままに1958年の日本移民50年祭を視野に「サンパウロ日本文化協会」が発足した。抗争後の日本人社会統合のリーダーシップをとったのは都市に住んでいた「負け組」のメンバーが中心であった。

暗殺事件で拘留されていた「勝ち組」のメンバーが60年代に釈放されたことにより、当時日本人社会でかつての事件が多少注目されたが、その後は日常生活で日系人は口にするものがなくなった。戦時中、祖国日本をひたすら信じるという「勝ち組」の心情を抱いて生活を送っていた日本移民の多くは、戦後、活発な布教活動を展開するようになった日本の新宗教に帰依していった。「祖国の喪失」と子弟のブラジル人としての成長を前にして移民1世は永住を決心した。日系2世がブラジル人として社会上昇を目指すようになると、この事件は日常的に話題に上ることはなくなり忘れられていった。他方、ヴァルガスの新国家体制が終焉してもブラジルは、「人種民主主義の国」の理念を国内外に発信し続けており²³、ブラジルの人種主義が絡んでいた「シンドウレンメイ事件」は忘れられていった。

再民主化がもたらした調査研究

21年にわたった軍事独裁政治が1985年に終焉し、1988年に自由、平等、正義を標語とする民主憲法が公布された。それまでの国家権力の抑圧に対する住民の抵抗の歴史に目が向けられるようになり、歴史研究者はブラジル近代を抑圧と抵抗の視点からの見直しを始めた。こうした視点からヴァルガスの新国家体制下の国家と国民の在り方を問う研究書が20世紀末以降発表されてきた。新国家体制下の日本移民にも注目する研究者が出現した。

再民主化以前における日本人社会の騒乱を扱った論述には2つの流れがみられる。その一つの流れは臣連関係者の裁判で通訳として、あるいは弁護士としてこの事件に関わり、戦後の日本人社会の騒乱について記したもので、4点ある。

- ① C. S. Moraes 1942：黄禍論の立場からブラジルにおける日本移民の危険性について語っている。Moraesは弁護士で、1937年にドイツ移民揺籃の町サンレオポルド市の事務局長に就任し、リオグランデドスル州に「アルベルト・トーレス友の会」²⁴支部を設立した人物である。
- ② M. B. Miranda 1948：タイトル *Shindo Renmei* にみられるように、臣連関係者の裁判での通訳の経験を通じて勝ち組（具体的には岸本次男の雑誌『断』）を非難、告発している。Mirandaは弁護士で、学生時代に日本政府の招聘によるサンパウロ大学訪問団に加わって日本を訪問している。日本での外国人日本語弁論大会では優勝もしている。
- ③ A. Fernandes 1949：Mirandaの見解に異を唱えたジャーナリストで、日本人が組織を作るのは日常生活の行為であって、決して共産主義者だからではないと主張した。また新国家体制下で日本人には情報を得る手段が限られていたために起こった事件であるとして、当時のブラジル社会が日本人を非難していたことに反論している。
- ④ H. Neves 1960：有罪となった臣連関係者の罪状消滅の判決を下した1958年の裁判の弁護士で、この裁判の過程や議論を記した。1934年にサンパウロ医大教員及び学生が日本政府の招待で訪日した学生の一人である。

もう一つの流れは、同時期の40年代から日本移民の文化変容や同化という文化人類学の立場からシンドウレンメイ事件を扱った研究である。この事件を政治問題としてではなく、文化の問題としてアプローチすることを提唱したのはE. Willemsで、ブラジルの日本移民の研究の先駆者である斉藤広志とともに、アカデミックなアプローチを行った(Willems, Emilio e Hiroshi Saito 1947)。その後、同様の視点から50年代から60年代に発表されたブラジルの日本移民に関する研究論文を共編著として斉藤広志と前山隆がまとめて1973年に発表している(Saito, H. e T. Maeyama 1973)²⁵。

再民主化以後、軍事政権から解放されたブラジル社会では、社会政治問題を自由に議論できる風潮を取り戻した。1988年の新憲法は軍事政権下の人権抑圧に対する反省から編纂され、その後マイノリティ住民の人権や文化を保障する法的手段が具体的に採られ、多民族多文化社会としてブラジルは再出発した。こうした中で、憲法の自由と正義の表明に則り、人権に関係する公文書の公開を可能とする法律が制定された。1991年1月8日の連邦法8159号は、国家と社会の安全と個人のプライバシーを損なわない限り、これまでの公文書がすべての住民に公開されることを保障した。この法に基づき、歴史研究者がブラジル近代史の見直しを提唱し、公文書を利用しての歴史研究のプロジェクトがサンパウロ大学を中心に立ち上げられた。

ヴァルガスの新国家体制下と60年代から80年代の軍事政権下で大いに活躍したDOPSには、調査尋問記録の膨大な一次資料が蓄積されていた。DOPSは旧共和制時代の1924年に創設され、時の政権に反対する社会政治運動の抑圧を目的に1983年まで存続した国家機関である。その下部組織と

して州政治社会秩序局（DEOPS=Departamento Estadual de Ordem Política e Social）があり、サンパウロ州では DEOPS/SP（Departamento Estadual Ordem Política e Social do São Paulo）と称した。DEOPS/SP はヴァルガスの新国家体制時代の 1940 年に創設され、軍事政権下の 1983 年まで存続し、政治犯の勾留を担った機関である。

かつての DEOPS/SP の建物は今日では州公文書館のひとつとなり、これまで保存されてきた資料は 1994 年 12 月の立法により一般公開が可能となった²⁶。これら資料を用いて近代ブラジル史の研究と若手の研究者の育成を目的としたプロジェクト PROIN（Projeto Integrado Arquivo Público do Estado e Universidade São Paulo）がサンパウロ大学と共に 1995 年末に立ち上げられた。サンパウロ大学の歴史学者 Maria Luiza Tucci Carneiro が「抑圧と抵抗のアーカイブによるプロジェクト」の責任者として所蔵されている調査カード 150 万枚を利用しての研究を大学院生とともにに行った。「ナチズム」、「共産主義」、「無政府主義者」、「抑制の地政学」、「イタリア人」、「日本人」、「スペイン人」、「学生」などをテーマとして直接 DEOPS の調査記録カードを分類考察し、それぞれのテーマに従ってその結果を「DEOPS の調査記録カードシリーズ」として発表した。引き続き各研究者はこの調査から得た研究テーマの探求を試み、「不寛容の歴史コレクション」として、あるいは「抑圧と抵抗の歴史シリーズ」として研究成果を発表している。

「DEOPS の調査記録カードシリーズ」の中で日本移民を取り上げた研究には、R. A. Dezem（2000）と M. Y. Takeuchi（2002）による 2 点がある。

Dezem は 1945-1953 年の臣道聯盟事件に直接関係するファイル 500 冊の調査を 1997 年に着手した。Dezem は 1908-1941 年までの日本移民とブラジルの移民政策を概観した後、1942-1946 年の DEOPS の日本人に対する抑圧とそれに刺激を受けた日本移民がナショナリズムを高揚させた結果であるとして臣道聯盟事件を扱っている。日本人に対する DEOPS の対応が、同じ逮捕者であるイタリア移民、スペイン移民、共産主義者とは異なって厳しかったことを記録カードの分析を通じて指摘している（Dezem 2000：79）。この問題を発展させて Dezem は、ブラジルにおける東洋人に関する人種的議論の歴史的経過を追った研究（Dezem 2005）を「不寛容の歴史コレクション」の中に収めている。

Takeuchi は、新国家体制下で同化政策²⁷が強化された 1939 年から新国家体制が終焉した 1945 年までの調書記録カード 154 枚を分析した。Takeuchi は「同化せずにブラジルに異分子^{シスト}を作っている日本人」として非難の対象となった時期の日本人の日常生活を記録カードの中から把握しようとした。154 枚の記録カードの内、45 枚は住居移転を申請したもの、41 枚は旅行許可（salvo-conduto）の申請、枢軸国言語である日本語を使用したことで捕らえられた者の調査記録 16 枚、集会や結社に関する調査記録は 9 枚であった。日常生活の中で仕事や家族訪問で旅行するにも DEOPS に届けて承諾を得る必要があった 6 年間は、枢軸国民となった日本人にとり如何に煩瑣な毎日であったことが想像できる。調書カードを通じて、当時の秩序局の外国人、特に日本人に対するステレオタイプやスティグマが読み取れる。そのほとんどが農業従事者であった当時の日本人には犯罪歴がないにもかかわらず、秩序局の基本的姿勢には日本人に対する疑惑と抑圧がみられ、「ブラジル国家の敵」として扱っていたことが指摘されている（Takeuchi 2005：14）。ここから Takeuchi は、ブラジルの政治家や医者といった知識人の人種主義と日本帝国の領土拡大政策からブラジルの日本移民に対する偏見の形成の歴史をたどった。その Takeuchi の成果（Takeuchi 2008）は「抑圧と抵抗の歴史シリーズ」に収録されている。日本の移民政策が国策化²⁸されてブラジル移民が多数に上ると、「ブラジルを占領しようとしている日本帝国」という恐れとともに人種主義者と黄禍論信奉者は、日本移民の導入がブラジル住民の身体的形成に害を及ぼすとして日本移民を阻止しようとする動きが国会や学会でみられるようになった。そして、1934 年の新憲法における移民割当て法の導入につながっ

たのである。しかし同時に、日本移民を擁護する国会議員もいたことを Takeuchi は言及し、ブラジル知識人の多様性を紹介している²⁹。さらに Takeuchi は 1897 年以降の雑誌に描かれてきた日本人及び中国人の姿を通して日本人に対する偏見の起源とその展開を追っている (Takeuchi 2016)。

サンパウロ大学のみでなく、他大学においても日本移民に対する偏見や差別に焦点を当てた研究が同時期に発表されている。現在パラナ連邦工科大学で歴史学を担当する E.C.Shizuno は、2005 年にパラナ連邦大学大学院生としてパラナ州の公文書館に保存されている DOPS の記録を用いて、30 年代から 40 年代の同化政策と国交断絶によるブラジル官憲の厳しい監視を経験したことが「アケボノ」という日本人青年の結社を生み出したことを史学研究の学会 ANPUH (Associação Nacional dos Professores Universitários de História) の年報に論文を投稿している (Shizuno 2005)。続いて第二次世界大戦中の日本移民のアイデンティティと官憲の対応を研究し、2005 年の研究論文を発展させて学術書を発表している (Shizuno 2010)。またカンピナス大学 (UNICAMP) で黒人に対する人種差別について研究をしていた歴史家の P. Nucci は、ブラジルの日本人に対する人種差別について考察している (Nucci 2010)。

こうしたアカデミックな分野での一連の業績は、「シンドウレンメイ事件」をブラジル社会の抑圧に対して日本移民が抵抗した証としてブラジルの近代史のなかに位置付けられた。他方、ジャーナリズムの世界では、2000 年に出版された *Corações sujos* (Morais 2000) が、日本人社会を含むブラジル社会に「シンドウレンメイ事件」を思い出させた。作者は著名なノンフィクション作家の Fernando Morais で、翌 2001 年にはブラジル最大の出版賞であるジャブチ賞 (Prêmio Jabuti) のルポルタージュ部門で最優秀賞を受賞し、事件の経過を親や祖父母の世代からほとんど耳にすることがなかった日系 2, 3 世が注目するところとなった。“Corações sujos (汚れた心)” とは、「勝ち組」が日本の敗戦を受け入れた「負け組」を意味した言葉である。Morais によれば、ブラジルメディアの大物シャトーブリアン (Assis Chateaubriand, 1892-1968 年) について取材していた折に、日系人のインタビュイーが「シンドウレンメイ事件」に口を閉ざしたことから関心を持つことになったという。調査に 5 年間を費やした。ジャーナリストによる「シンドウレンメイ事件」の記述は容易に読者を惹き付けた。しかも、90 年代にはブラジルは日本ブームを迎えており、デカセギが関心と呼んでいたと同時に、アニメに漫画、コスプレといったポップカルチャーや和食が、非日系ブラジル人の間に浸透していた。そんな時に発売された Morais の本であった。版を重ねることが稀なブラジルの出版業界にあって、3 版を重ねる異例の反響となった。エピローグには起訴された 381 名と国外追放の判決を受けた 80 名の氏名がすべて記してあった。これらの実名を挙げられた人々の関係者はこの本を受け止めるのに戸惑った。

日系 2 世のジャーナリストの J. Okubaro は、サンパウロ州の奥地で農業に従事してブラジル人の子孫を残した父親の生き様を、ブラジルの日本移民のほとんどに共通した生き方であったとして父親の生涯を記した (Okubaro 2006)。Okubaro の父 Masateru は、1918 年に 13 歳で沖縄からコーヒー農園の労働者としてブラジルに渡った。蓄財が目的ではあったが、その実現は困難で、配耕先の農園から家族や仲間と逃亡し、サンパウロ州中部のアララケアラで自営農への道を歩んだ。沖縄出身ということで二重のマイノリティ住民としての生活を送った。つまり、内地の日本人とは異なるとされながらブラジルでは日本人として扱われた。だからこそ、父親は愛国者として強烈なナショナリストとなり、臣道聯盟の会員になったが、当時はヴァルガスのナショナリズムが強化されていた時でもあった。国家騒乱の容疑者として起訴されたがほどなく釈放された。その後は日本の新宗教「生長の家」に帰依した。子孫に借金も財産も残さなかったが、高等教育は授けさせた。孫 24 人に囲まれた父親の一生は、究めて一般的なブラジルの日本移民の姿であったとしている。そして、Okubaro

は日本移民としての父親の人生に喝采を送っている。

さらに、日本移民 100 周年を迎える 2008 年 4 月 20 日、同じ日系人のジャーナリスト Martinas Suzuki Jr. は *Folha de São Paulo* 紙に “Rompendo silêncio (沈黙を破って)” という記事を投稿した (Suzuki 2008)。1946 年の憲法制定会議で提出された日本移民導入反対の条項案から遡り、1901 年に在日ブラジル公使が「劣等民族 (日本人のこと)」（カッコ内は筆者）と「ブラジル民族」との混淆は危険な結果になるとしたブラジル外務省宛ての手紙に言及している。ここから順次ブラジルの日本人に対する差別と同時に日本帝国の軍事侵攻に警戒を発するようになったブラジルの歴史を説明している。日本人の行動の一挙手一投足がブラジル官憲によって疑念の目で見られた新国家体制下の日本移民の生き辛さを事例とともに紹介している。日本人に対する偏見や差別を煽ることは、ブラジル国内のナショナリズムを高揚させるのに効果的であった。同じ枢軸国民でもドイツ移民やイタリア移民はヨーロッパ移民故にブラジル社会に同化しやすいが、身体的特徴がヨーロッパ移民とは異なる日本移民に対する偏見や差別を煽るのは容易であった。子供同士が喧嘩をした、借金が返せない、隣が煩いなどといった理由でブラジル人は日本人を日常的に官憲に訴えるようになっていた。こうした風潮のなかで敗戦の報を前にして始まった日本移民の悲劇であった。Suzuki は日本移民の研究はこれまで同化や文化変容の問題として扱われてきており、ブラジルの人種主義に対する議論は縮小化されてきたと批判している。

Corações Sujos ショックはこれで終わらなかった。2011 年には *Corações Sujos* から着想を得た同名の映画 *Corações Sujos (汚れた心)* が日本の著名な俳優を招いて制作された。日本移民社会の騒乱の映像化は、人々に関心を向けさせるのにはより容易であった。時を同じくして米州人権委員会から要請を受けたブラジルは、独裁政権下で人権を抑圧され行方不明になった国民に関する情報を明らかにする「真実委員会 (Comissão Nacional de Verdade)」を立ち上げた。軍事政権時代のみでなく、それ以前の 1946 年から 64 年の軍事政権樹立までの期間も委員会が調査する対象とした。ここで再度、国家権力の抑圧による犠牲者として日本移民に目が向けられた。

2011 年にはリオデジャネイロ連邦大学が「ブラジル日本文化協会 (ICBJ)」と協力して、新国家体制下のリオの日本移民のドキュメンタリー映像 *Perigo amarelo- o lado B da imigração japonesa* (黄禍-日本移民の B 面) を制作した。監督の David Leal はブラジルのナショナリズム時代にはたとえブラジルで生まれた日系ブラジル人であっても「日本人」として差別されたことを告発している。翌 2012 年には日系 3 世の Mário Jun Okuhara が、*Corações Sujos* に記された 80 名の内の一人が当時の状況を語った記録映像 *Yami no ichinichi (闇の一日)* を制作発表した。印象深いのは、これまで用いられてきた DOPS の彼の証言の記録 (『ブラジル日本移民 80 年史』: 204 及び Dezem 2000 : 41) と現在の証言とが異なっていることである。さらに離島の拘置所内では、畑を耕しての自給自足生活であったが、時には尺八の稽古もでき、親族の訪問もあり、それほど辛い生活ではなかったと、現在は観光地となった拘置所を訪れながら語っている。島を離れていく撮影隊の船に日本の旗を振って見送る歴史遺産となった拘置所の管理人達の姿は印象的である。新国家体制下では枢軸国の国旗を手にする事は禁止されていたことを考えると、70 年という長い時間の中での変化が感じられる。この映像は「サンパウロ州真実小委員会」で上映され、最終的には日本移民に対する人種差別を認めて委員会として委員長が謝罪している。

さらに 2016 年には *Código amarelo* (黄色人の法令) と皮肉ったタイトルの日本移民に関する法令集 (Neto Shiraishi, J. e M. T. Shiraishi 2016) が出版され、日本移民に対して制定された差別的法の存在を告発している。

おわりに

21年間に及んだ軍事政権が退場し、民主的風潮の中でブラジル人は、自国の過去の人権侵害の真実に向き合うことができるようになった。この結果、第二次世界大戦終焉直後のブラジルの日本人の騒乱をブラジルの日本人及びその社会内のみの問題としてではなく、ブラジルの人種主義の歴史と関係づけて捉え直すことができたのである。

永い間、ブラジルの日本人や日系人はブラジル社会の偏見や差別に気づきながらもマイノリティとして位置づけられている以上は、ブラジルの社会政治状況に異を唱えることができなかった。軍事政権下の70年代に、サンパウロ大学（USP）の構内に掲げられた垂れ幕があった。「日本人を一人殺してサンパウロ大学に入ろう！」と書かれていた。社会上昇を目指して日系人はサンパウロ大学に競って入学していた時代で、日系人学生のサンパウロ大学に占める割合は15%程に及んでいた。³⁰同時期のサンパウロ州の日系人の割合が1%であることを考慮すると、ブラジルの最難校のサンパウロ大学における日系人学生の占める割合はバランスを欠くものであった。この垂れ幕に書かれた内容については多くの日系人が知っていた。しかし、それはサンパウロの人がよくいう冗談として真剣には取り合わなかった。むしろマイノリティの日系人は取り合うことができなかったのである。同時期、アカデミックな世界で頂点に上り詰めたある日系人は、決して日本語を話さなかったし、日本語が分かる素振りもしなかった。軍事政権下では政府批判をすれば、交通事故を装って殺害されていた時代である。しかも日系人として偏見の対象になっていた時代に、マイノリティとして生き延びるには、身体的特徴が変えられないなら、それ以外の「日本人（ジャポネース）」として偏見の対象となるものはできる限り秘する必要があるであった。

20世紀末にナショナリズムから解き放されて多民族多文化の存在を認めたブラジル社会は、異なる多様な民族のそれぞれの文化がブラジル文化を構成する要素であると解釈されるようになった。つまり、多文化主義下では、「ブラジル人」ではなく「ブラジルの日本人」としての存在が認められたことにより、日本人のブラジルへの適応については議論する必要がなくなったのである。*Corações sujos*で著者のMoraisは、日本移民は「シンドウレンメイ事件」下で「日本人」として生きていたのだと語っている。またOkubaroも、父親はブラジルで「日本人」として生きたのだと主張している。同化政策とナショナリズムの時代には外国移民には、ブラジル社会への適応や同化の諸状態が問題の焦点となった。こうした視点はすでに過去のものになりつつあるのである。

今や、サンパウロの「東洋街（Bairro Oriental）」にはアジア的な味覚や商品を求めて非日系ブラジル人が週末に押し寄せるようになった。かつてのように日本人や日系人のみが行き交うだけの地域ではなくなった。かつての枢軸国民であるドイツ移民やイタリア移民が建設した南部の町でも今や、かつてドイツ移民やイタリア移民が持ち込んだそれぞれの方言が市の公用言語として認められるようになってきている。アフリカ系文化や先住民文化と並んで、ブラジルには多文化主義が実現されつつあり、その多文化の中に日系文化も一要素として加わったのである。ナショナリズムを乗り越えた現在、やっと日本人に対する差別と偏見にブラジル社会は向き合えるようになったといえよう。

註

¹ 「抗争」ではなく「騒乱」「混乱」「対立」など筆者によって多様な呼称が用いられてきている。本稿では従来の呼称を用いる。ただし、「勝ち負け抗争」から派生したブラジル社会や日本人社会内の混乱などについては、文脈に応じて「騒乱」「混乱」「対立」などを用いている。

- 2 原則、サンパウロ市は「サンパウロ」と表記し、サンパウロ州とは区別する。
- 3 日本移民は領事館を通じて直接日本とつながっており、ブラジルにあっても「日本人」として生活していた。1942年1月の日本とブラジルの国交断絶後、在ブラジルの外交官、商社社員は7月のスウェーデンの交換船でブラジルを去っている。
- 4 海興は「海外興業株式会社」の略称。1918年に日本政府によって設立された移植民会社で、主として移民取扱業務を扱っていたが、移住地建設経営も手掛けている。
- 5 出稼ぎを意図してハワイに渡った日本移民同様に、戦前のブラジルの日本移民もその本音は蓄財を果たして帰国することであった。
- 6 1939年のサンパウロの日本人集住地域では、子供向けも含む雑誌購読率は7割に及び、サンパウロ発行の日本語新聞の購読率は約9割であった（『ブラジル日本移民80年史』：146）。
- 7 1942年1月にブラジルは連合国に加わって参戦している。当時、日本移民にとりブラジルで経済活動することは敵を利することになり、特に米国に輸出されて軍事に利用されると考えられた薄荷や生糸は「利敵産業」とブラジルの日本人に呼ばれた。
- 8 『ブラジル日本移民70年史』（90-91）による数値で、実数の把握は不可能であろう。
- 9 1927年に日本政府が出資してブラジルに日本人移住地を建設することを目的に設立された「海外移住組合連合会」のブラジル現地会社「ブラジル拓殖組合」の略称。
- 10 当時のバストス産業組合の従業員の解雇をめぐる問題が原因ともいわれることがあるが、今のところ憶測に留まっている。
- 11 2011年9月バストスでの聞き取りによる。
- 12 前掲『ブラジル日本移民70年史』：91。
- 13 1937-1945年は新国家体制と呼ばれる独裁体制。
- 14 ヴェルガス政権下で制定された1934年の新憲法では各国の移民数2%割当て法が定められた。1924年の米国の移民割当て法に倣って挿入された条項で、1933年、34年はブラジル向け日本移民の最盛期で、それまでの入国数最多のポルトガル移民を凌ぐ数であった。割当て法は優生学の立場から日本移民の導入に反対し続けていたMiguel Couto（優生学を報じる医者であり、リオ選出の上院議員）が提出した条項である。
- 15 主な提案者は1934年の移民2%割当て法を憲法に導入したMiguel Coutoの息子のMiguel Couto Filho（リオデジャネイロ州に選出の上院議員）である。
- 16 これらの数値はMorais 2000：330参照。
- 17 枢軸国民の結社は経済活動を目的にした結社（例えば、産業組合）を除き禁止されていた。またヴェルガスのナショナリズム政策下では外国人のみの集団も禁止されていた。従って、経済活動以外の日本人のみの結社は法令違反となるので、秘密結社と判断された。
- 18 脇山は、当時日本人最大の集住地バストス移住地（日本政府の建設による）の産業組合の理事長であると同時に、産業組合中央会理事長でもあった。1940年の皇紀2600年の日本の式典には産業組合中央会理事長として招かれている。国交断絶後に脇山はサンパウロ市に移動させられ政治社会秩序局の監視下に置かれた。
- 19 事件の経緯は三田 2009：113-210参照。
- 20 文献によっては「特行隊」の表記もある。「天誅組」「暗殺隊」「挺身推薦部」「決死隊」などの名称もあったようである（『ブラジル日本移民80年史』205-207参照）。
- 21 Dezem, 2000：77 及び『ブラジル日本移民80年史』205参照。
- 22 Dezem, op. cit. 81.

- ²³ といって、ブラジルに人種偏見や差別がなくなったわけではない。戦後のブラジル社会の人種関係については三田 2013：43-62 参照。
- ²⁴ Alberto Torres (1865-1917) は政治家であり、ジャーナリストで、20 世紀初頭のブラジルの代表的な人種主義者の一人。1897-1900 年リオデジャネイロ州知事を務めている。旧共和制下でブラジル国家及びブラジル国民の形成に関する著述を残している。
- ²⁵ 同時期に「勝ち負け抗争」を日本語で記したものに高木 (1970) 及び藤崎 (1974) がある。80 年前後には、文化変容の一現象として説明を試みた前山 (1982) や日本人社会のアノミー現象として捉えた三田 (1978) などが発表されている。その他の文献に関しては長尾 (2016) に詳しい。
- ²⁶ これらの調査記録カードを保管していたサンパウロの DEOPS は、2009 年 1 月に「サンパウロ抵抗のメモリアル (O Memorial da Resistência de São Paulo)」として関連のドキュメントなどを展示する資料館となった。
- ²⁷ 外国語学校の閉鎖、外国語の使用の禁止、外国語新聞発行の禁止、都市の日本人集住地からの立ち退き、枢軸国人の資産凍結などがあった。
- ²⁸ 1915 年から 1932 年に展開した国策政策として南米航路の開設、海外興業株式会社の設立、渡航補助金の交付、渡航費及び必要経費の交付、移民収容所の建設、渡航費準備金の交付、海外移住組合連合会の設立、長期低利子の融資、南米拓殖株式会社の設立、アマゾニア研究所の設立などをあげることができる。戦前期の移民送出国策期の 1928 - 34 年に送出されたブラジル向け日本移民は戦前期のその 57% に当たる 10 万 8258 人を送出した (三田 1995：111-112)。
- ²⁹ 日本人を擁護した著作には Kondor (1934) 及び Nestor (1934) がある。また、ジャーナリスト、企業家、政治家、南米一最大のメディア・マグロマリット、作家、弁護士で、1940 - 60 年のブラジルに最も大きな影響を与えた人物とされる前出のシャトーブリアンは、1933 年にサンパウロ州奥地の日本人綿作地帯を視察して日本人の就労姿勢を観察し、日本人を擁護している。
- ³⁰ 『ブラジル日本移民 80 年史』：390 及び『ブラジル移民百年史第一巻』：250 参照。

引用文献リスト

- Amorim, Vicente (direção) 2012 *Corações sujos*. (日本でも 2012 年 7 月に公開されている。)
- Dezem, Rogério A. 2000 *Shindoo - Renmei: terrorismo e repressão*, São Paulo: Arquivo do Estado, Imprensa Oficial.
- 2005 *Matizes do “Amarelo” : a gênese dos discursos sobre os orientais no Brasil (1878-1908)*, São Paulo: Associação Editorial Humanitas / FAPESP.
- Fernandes, Alexandre 1949 *A verdade sobre a Shindo Renmei*: São Paulo, n.d.
- Kondor, Alexandre (org.) 1934 *Factos e opiniões sobre a imigração japonesa*, Rio de Janeiro: Calvino Filho Editor.
- Kumasaka, Yorihiro e Hiroshi Saito 1973 “Kachigumi: uma delusão coletiva entre os japoneses e seus descendentes no Brasil” in: Saito, Hiroshi e Takashi Maeyama (orgs.) *Assimilação e integração dos japoneses no Brasil*, São Paulo/Rio de Janeiro: Edusp/Vozes.
- Lesser, Jeffrey 1999 *Negotiating National Identity: Immigrants, Minorities, and the Struggle for Ethnicity in Brazil*, Durham: Duke University Press. (フェリー・レッサー 2016 『ブラジルのアジア・中東系移民と国民性の構築』、鈴木茂・佐々木剛二訳、明石書店)
- Miranda, Mario Botelho de 1948 *Shindo Renmei: terrorismo e extorsão*, São Paulo: editora Saraiva.

- Mita, Chiyoko 1999 *Bastos: uma comunidade japonesa no Brasil*, São Paulo: Humanitas.
- Moraes, Carlos de Souza 1942 *A ofensiva japonesa no Brasil: aspecto social econômico e político da colonização nipônica*, Porto Alegre: Edição da Livraria do Globo.
- Morais, Fernando 2000 *Corações sujos-a história da Shindo Renmei*, São Paulo: Companhia das Letras.
- Nakadate, Jouji 1988 *O Japão venceu os aliados na Segunda Guerra Mundial? :o movimento social “Shindô-Renmei (1945/1949)”*, Dissertação do Mestrado em Ciências Humanas, São Paulo: PUC-SP.
- Nestor, Ascoli 1934 *O japonês no Brasil*, Rio de Janeiro: Ed. Calvino Filho.
- Neves, Herculano 1960 *O processo da Shindo-Renmei e demais associações secretas japonesas no Brasil*, São Paulo: s/ed.
- Nucci, Priscila 2010 *Os intelectuais diante do racismo antinipônico no Brasil- textos e silêncios*, São Paulo, Fapesp/Annablume.
- Okubaro, Jorge J. 2006 *O súdito-Banzai, Masateru!* Ed. Terceira Nome.
- Saito, H, e T, Maeyama(orgs.) 1973 *Assimilação e integração dos japoneses no Brasil*, Petrópolis: Vozes.
- Shintani, Alberto Hikaru 2013 *World War II as Seen in Life Records of Japanese in Brazil: A Study of Diaries, Newspapers and Radio Broadcasting*, Kyoto University.
- Shiraishi Neto, Joaquim e Mirtes Tieko Shiraishi (orgs.) 2016 *Código amarelo: dispositivos discriminatórios de imigrantes japoneses no Brasil (日本人移民関連法令集)*, São Luiz: EDUFMA.
- Shizuno, Elena Camargo 2005 “Bandeirantes do oriente ou “perigo amarelo”: os imigrantes japoneses e a DOPS na década de 40” *ANPUH XXIII.*, 1-8.
- 2010 *Os imigrantes japoneses na Segunda Guerra Mundial-bandeirantes do oriente ou perigo amarelo no Brasil*, Londrina: Edeal.
- Suzuki, Martinus Jr. 2008 “Rompendo silêncio”, *Folha de São Paulo*, 20 de abril de 2008.
- Takeuchi, Marcia Yumi 2002 *O perigo amarelo em tempos de guerra (1939-1945)*, São Paulo: Arquivo do Estado, Imprensa Oficial.
- 2008 *O perigo amarelo : imagens do mito, realidade de preconceito(1920-1945)* São Paulo: Associação Editorial Humanitas/FAPESP.
- 2016 *Imigração japonesa nas revistas ilustradas -preconceito e imaginário social*, São Paulo: Editora da Universidade de São Paulo/ FAPESP.
- Willems, Emilio e Hiroshi Saito 1947 “Shindô-Renmei: um problema de aculturação”, *Sociologia*, vol. IX, n. 2 (São Paulo)132-152.
- Perigo amarelo - o lado B da imigração japonesa* (Leal, David 制作) <https://www.facebook.com/abrangencias/videos/vb.198204226921113/89128636094226/?type=2&theater> (閲覧日2017年10月20日)
- Yami no ichinichi (闇の一日)* (Okuhara, Mário Jun 制作) <https://www.youtube.com/watch?V=y8SxGcRz8vc> (閲覧日2017年10月20日)
- 佐藤早苗 1998a 「ブラジル「勝ち組」50年目の真実一、隠蔽された“恥部”」『正論』扶桑社、10月号、120-131。
- 1998b 「ブラジル「勝ち組」50年目の真実二、弾圧」『正論』扶桑社、11月号、168-178。
- 1998c 「ブラジル「勝ち組」50年目の真実三、逆境の中で」『正論』扶桑社、12月号、124-134。
- 1999a 「ブラジル「勝ち組」50年目の真実四、「勝ち組」生存者の悲劇」『正論』扶桑社、

- 1月号、134-144。
- 諏訪三男 2010「勝ち組、負け組抗争を通じたブラジル日本人移民の心性の変遷について—新しい精神の形成を求めて—」『社会学論集』早稲田大学大学院社会科学研究所、63-73。
- 高木俊朗 1970『狂信』朝日出版社。
- 外山脩 2006『ブラジル日系社会百年の水流—日本外に日本人とその子孫の歴史を創った先人たちの軌跡—』トッパン・プレス印刷出版。
- 長尾直洋 2016「ブラジル日系移民研究における榎木久一資料の重要性に関する一考察—サンパウロ人文科学研究所所蔵の新資料を踏まえて」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』第18号149-163。
- 半田知雄 1970『移民の生活の歴史ブラジル日系人の歩んだ道』サンパウロ人文科学研究所。
- (編) 1976『ブラジル日本移民史年表』サンパウロ人文科学研究所。
- 深沢正雪 2017『「勝ち組」異聞—ブラジル日系社会の戦後70年』無明舎出版。
- 藤崎康夫 1974『陛下は生きておられた！ ブラジル勝ち組の記録』新人物往来社。
- ブラジル日本移民70年史編さん委員会 1980『ブラジル日本移民70年史』ブラジル日本文化協会。
- ブラジル日本移民80年史編纂委員会1991『ブラジル日本移民八十年史』ブラジル日本文化協会移民80年祭祭典委員会。
- ブラジル日本移民百周年記念協会 2012『ブラジル日本移民百年史 第1巻』トッパン・プレス。
- ブラジル日本移民百周年記念協会 2013『ブラジル日本移民百年史第5巻』トッパン・プレス。
- 前山隆 1982『移民の日本回帰運動』日本放送出版協会。
- 1996『エスニシティとブラジル日系人—文化人類学的研究—』御茶の水書房。
- 2002「1920年代ブラジル知識人のアジア人種観—日本人観を中心に—」柳田利夫編『ラテンアメリカの日系人—国家とエスニシティ』慶應義塾大学出版会、1-40。
- 三田千代子 1978「ブラジルに於ける戦前日本人社会の社会制度と文化目標の矛盾：勝負抗争の社会的背景」『ラテン・アメリカ論集』ラテン・アメリカ政経学会、11-12号、38-65。
- 1988「ナショナリズムと民族集団—ブラジルの国家統合と日本人移住者」『外交時報』No.1251 57-70。
- 1995「ブラジルの外国移民政策と日本移民」『日本ブラジル交流史』日本ブラジル交流史編纂委員会、ブラジル中央協会、93-116。
- 1997「ブラジルにおける国民国家の形成と日本移民—勝ち負け抗争の社会歴史的背景」移民研究会編『戦争と日本人移民』東洋書林、285-308。
- 2009『「出稼ぎ」から「デカセギ」へ—ブラジル移民100年にみる人と文化のダイナミズム』不二出版株式会社。
- 2013「多人種多民族社会の形成と課題」丸山浩明編『ブラジル』世界地誌シリーズ、朝倉書店、48-62。
- 宮尾進 2003『臣道聯盟移民空白時代と同胞社会の混乱—臣道聯盟事件を中心に—』サンパウロ人文科学研究所。

The Shindo Renmei Case – As One Page of Modern History of Brazil

Chiyoko Mita (Sophia University)

When the Pacific War ended, a rumor circulated among the Japanese immigrants in Brazil that Japan had won the war. An ensuing conflict then broke out between those who believed in Japan's victory and those who recognized Japan's defeat. The conflict divided Japanese community into two groups that antagonized each other until the end of the 1940s.

The purpose of this paper is to understand this conflict among Japanese immigrants through a new historical perspective of examining papers on the topic since the 1990s . This new perspective emerged with the re-democratization in Brazil at the end of the twentieth century. The conflict was regarded as a problem of assimilation and acculturation of Japanese immigrants in Brazil. Today, however, under the new perspective this issue is closely related to the history of racism in Brazil. From that perspective, it can be said that conflict within an ethnic community finally came to be included as one page of modern history of Brazil.

Keywords: the Shindo Renmei case, Kachi-gumi, racism, yellow peril, nationalism, World War II and Japanese immigrants